

## 限府小プランにおける社会認識教育の構造と展開 (3)

—子供の欲求・要求と地域の生活課題に基づくコアカリキュラム  
における社会認識教育の有効性と限界—

谷本美彦\*

A Study on the Theoretical Structure and Practice of Social Studies in a Core-Curriculum of the Waifu Elementary School after the World War : Part 3

Yoshihiko TANIMOTO \*

- 1 第2次大戦後の新教育期のカリキュラム編成運動における限府小プランの位置と分析視点
- 2 第二次限府プランの構成原理
- 3 第二次補正プランの構成原理  
(以上本紀要第4号掲載)
- 4 第二次補正プランに基づく具体化の過程及び展開案の分析
  - (1) 第二次補正プランから単元展開案に至る具体化の過程  
(以上本紀要第9号掲載)
  - (2) 学習単元(中心課程)における社会認識形成過程の分析

昭和23年以降に作成された限府小学校のプラン(第二次限府プラン及び第二次補正プラン)では、前述のように社会科の学習は、学習単元(中心課程)の中に包摂されている。したがって、限府小学校における社会認識教育の実態やその有効性及び限界を考察する場合、より実践に近い各単元の展開案を取り上げて分析する必要がある。しかし、昭和24年12月26日～28日に開催されたコア・カリキュラム連盟九州地区研究集会に間に合わせるために作成された第二次補正プラン(『限府プラン 第一集 資料単元の構成と展開』、『限府プラン 第二集 関連課程系統表 経験要素表』、『限府プラン—第三集—展開カリキュラム』いずれも昭和24年12月10日発行)のうち、『限府プラン—第三集—展開カリキュラム』の単元展開案は12月から3月までの案しか載せられていない。また当日配布されたと予想される各学級における展開案は、前日の生田(現姓:益崎)とよ教諭作成の展開案しか現存していない。そこで、『限府プラン—第三集—展開カリキュラム』に載せられている単元展開案を中心に分析を進めてゆく。

限府プランの学習単元(中心課程)は、すでに考察したように『補説』に示されている作業単元に準拠して作成されている。そこで、限府プランの学習単元(中心課程)を通して育成さ

\* 宮崎大学 教育文化学部

れる社会認識の質や内容を、具体的な形で取り出し、考察し評価する場合、『展開カリキュラム』の学習单元（中心单元）の学習過程自体の考察だけでなく、『補説』に掲載されている作業单元例と比較したり、また低学年では平成元年に設置された「生活科」の事例と比較したりすることを通して、育成される社会認識の質、内容及び育成の方法原理の検討を行なう。

#### ① 学習单元における社会認識形成の分析視点

経験主義教育に基づく社会認識教育の特色は、知識を学校で学ぶ狭い、意味の固定した概念や言明に限定しないで、個々のこどもが学校の内外で学び取っている社会的観念の総体を指すとともに、それが連続的に生長する過程ととらえている点であろう。

経験主義教育の社会科でねらいとされている知識は、「薬局とは、薬を売っているところ」と言ったレベルの知識ではなく、こどもが通学途中の見聞や学校での校区探検、風邪をひいて行ったお医者での経験、家族で行った郊外のモールでの経験等を通して学び取る総体、すなわち薬局には①市販の薬（医薬品）だけ売っている薬局、②市販の薬だけでなく健康・保健に関する日用品（医薬外品）も売っている薬局、③医者処方箋がないと薬を買えない薬局、薬局のほかに④多種多様な日用雑貨だけでなく、薬も売っている「ドラッグストア」があることを次々に認識することを通して得られる知識である。そして、薬局の内容を多義的に豊富する学習に留まらず、母親に「胃薬と歯磨き粉、歯ブラシを買ってきて欲しい」と使いを頼まれた時、②か④に行けば売っているが、徒歩で行くには②しかないと判断することの総体を指している。

こどもは、これ以後、「薬局」という記号の表現と内容の対応関係の獲得、言い換えれば「記号機能を生成させる規則」であるコードを獲得し、実際の生活の中で使いこなせることができる。池田久美子氏は、こうした経験主義教育の学習の特質を、「コード増殖としての学習<sup>1)</sup>」、すなわち「まだコード化されていない状況に直面し、それを解釈しようと試み、それによってコード自体をよりいっそう分節的でより範囲の状況処理しうるものに変えていくことである。つまり、コードを増殖させることである。このとき、既存のコードは新しい状況の解釈の手がかり(cue)として使われる。<sup>2)</sup>」と論じている。そして、「コード増殖としての学習」にとって不可欠なことは、パース(C.S.Peice)の探究の方法の3段階、すなわち①アブダクション(abduction)、②演繹、③帰納のうち、「既存のコードを暫定的に変更して仮のコードを設定する試み」であるアブダクションが活発に行なわれる要件を整えることであるという。そのためには、既存のコードが、多義的で豊富な内容(濃密なテキスト)を持つ必要があるという。

したがって、経験主義教育に立つ社会科において、「コード増殖としての学習」を可能にするためには、まず既存のコードを、多義的で豊富な内容に変えていく学習活動(いわゆるはいまわりと批判されている経験的な活動)が組織されることであり、さらにそれに基づいて①アブダクション(既存のコードを暫定的に変更して仮のコードを設定する試み)―②演繹(仮のコードを基に新たな状況を含む説明可能な命題を作成し、その命題から推論する過程)―③帰納(事例を通して命題を検証する過程)という学習過程が組織されているかどうかということになる。以下こうした視点から、『展開カリキュラム』における具体的な学習单元を取上げて、社会認識形成の分析を行なうことにする。

#### ② 第2学年の学習单元「おみせ」における社会認識形成の分析とその評価

『限府プラン(第一集、第二集、第三集)』のうち、資料单元(第一集)は学校全体案であ

のに対し、展開カリキュラム（第三集）はそれぞれの学年展開案といってよい。したがって、展開カリキュラムの学習単元が、資料単元に示された単元内容に全く準拠しているわけではない。展開カリキュラムの学習単元「おみせ」（以下「おみせ」と略称）はその典型の一つである。具体的には、資料単元がさまざまなお店を調べたり、見学したりする活動を媒介に「ごっこ」遊びを行なう展開になっているのに対して、「おみせ」では、前述の活動の合間に「学習単元」と並んで限府プランのもう一つの柱である「生活こよみ」との接点となる季節の行事や活動、例えばお月見、運動会及び遠足等を組み込んでいる点である。前述の特徴を持つ「おみせ」を、社会認識教育の観点から分析し、その特質を明らかにする。

学習単元「おみせ」の特質を明らかにするため、『補説』に例示されている作業単元「近所の生活」（第2学年）と比較しながら考察を進める。まず、「おみせ」に示されている「この単元の効用」の構造（「民主的な社会生活にとって」及び「児童にとって」の観点から考察し、効用を説いている。）及び内容は、一部を除いて「近所の生活」に示されているものと同一である。次に、「単元の効用」を達成するための具体策である「おみせ」と「近所の生活」の学習展開過程～表（1）参照～の考察を行なう。

「おみせ」及び「近所の生活」の学習展開は、基本的には児童の活動意欲・欲求を誘発して学習活動を進めていく構造になっている。前者の「おみせ」の場合、表（1）の展開過程にみられるように、教師による疑問や問題の誘発活動が若干あるものの、原則的に児童の調べてみたい、見学してみたい、製作してみたいといった児童の基本的欲求を誘導し、それを起点に活動が連続的に展開される構造になっている。しかし、後者の「近所の生活」では、活動の途中や終結時に疑問点や問題を発見させ、それをどう解決するかという状況へと誘導する教師の手立てが求められている（学習過程中の波線の囲み部分：筆者書き入れ）。典型事例として、「トラックや牛車や手車は米や野菜をどこにはこぶのかという問題がおこるであろう。もし児童の問題にならないときは、教師がこの問いをだす<sup>3)</sup>」を挙げることができる。したがって、「おみせ」の学習が、典型的なプロジェクトメソッド<sup>4)</sup>に基づいているのに対し、「近所の生活」の学習は、問題解決を組み込んだプロジェクトメソッド<sup>5)</sup>を採用しているといえる。

前述の社会認識形成の分析視点から、両者を比較してみよう。「おみせ」の学習は、教師による誘導によって、お店に対する児童の学習意欲や活動意欲が高まり、「お店ごっこ」をしたという活動から授業が本格的に開始されている。児童は「おみせ」に関する既存のコードを手がかりに、「それぞれのお店には売る品物が置いてある」、「品物には値段がある」、「品物はお金で売り買いする」等の内容を想起して、売る商品やお金の製作に取りかかる。しかし、店の看板や品物の並べ方、売り方等分からないことが次々出てくる。そこで、「お店の見学」に行く。見学後に、見学前の知識に加え見学で知りえた知識をもとに、「お店ごっこ」の準備・計画を立てて、実際に「ごっこ遊び」を行なう。さらに、配給所遊びのあとに、もっと大きな遊びをしようということになる。そこで、「多くの品物が、どうしてよそから私たちの町に入ってくるのか」という疑問がでて、市場や八百屋さんの見学に行き、青果市場から果物や野菜などが八百屋さんへ送られること等を知る。そこで、知りえたことを含んだ計画を立て、大掛かりな「ごっこ遊び」を実践している。学習展開を見る限り、「お店ごっこ」を行なうに当たって問題を発見し、それに対して既知のコードを暫定的に変更して仮のコードを設定するアブダクションを起こさせる教師の支援がなされているが、遊びとの整合性を欠いているケースや頻度が極めて少ない。したがって、こどもが既存する「お店」の内容に「お店には

学習単元「おみせ」と作業単元「近所の生活」の学習過程 表(1)

学習単元「おみせ」の学習過程	作業単元「近所の生活」の学習過程
<p>○ 今日から2学期。夏休み前の計画の如く学校学級の展覧会をする予定なので作品を提出させる。児童「先生展覧会って何ですか」、児童「展覧会をしよう」、教師「しよう。どんなにしてやろうか。」と訴えてみよう。</p> <p>○ 展覧会を計画したい。 ・ 展覧会の方法を考える。各々の意見がでる。 ・ 展覧会をする。</p> <p>○ 賞品わたし(夏休み中に学習したものの中から優秀なものをみんなでほめる。わたしもあんなになりたい。かくして学校の小展覧会はこどもの興味とともに終わるであろう。)</p> <p>(導入)</p> <p>○ 2学期はしっかりおべんきょうしようというところで、教師「みんな盆にはどこにゆきましたか。夏休みには何を買いましたか。」児童「先生僕は下駄を買いました」。児童「私は着物を買いました」。児童「私も着物を買いました」。児童は経験を次々に発表する。教師「ではどんなものか見せて頂きましょう」。児童はすなおに色々な品物を持ってきてであろう。そして、子供達は自分の品物に興味をもち、「先生もってきました」。「お店ごっこしよう」と児童の欲求は激しく教師をささうことであろう。</p> <p>(学習活動)</p> <p>○ お店ごっこをしたい。 ・ 計画を立てる話し合いをしよう。各班別にしたい。お店をつくりたい。お金を作りたい。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">グループに分かれ仕事にかかり色々分からないことが出来てきたり論争などが起こってきて結局町のお店を見に行く必要を感じるであろう。</p> <p>○ お店見学</p> <p>○ お店ごっこの準備をして、お店ごっこをする。</p> <p>○ お店ごっこの反省 (この頃になると、ある子供が秋の草花をもって教室にかざる。彼岸花も持ってくる。)</p> <p>○ お月見をしよう。</p> <p>○ お月見ごっこをする。</p> <p>○ お月見の反省をする。</p> <p>(秋晴れのよい天気は、なんとなくそして広々とした青空はスポーツの秋というか子供も外に出て走ってみたいと児童の心をそそるであろう。)</p> <p>○ 運動会のお話をしよう。</p> <p>○ 運動会のおけいこをしよう。</p> <p>○ 楽しい運動会をしよう。</p> <p>○ 運動会の反省をしよう。 (運動会が終われば、町の年中行事である秋祭りがある。また、街のお店には色々な品物が陳列され飾り付けが始まる。教室での話は、秋祭りのことで騒々しくなる。教師は「お店はどんなだろう」と話しかける。子供達は「先生、運動会のように飾ってある。」「先生、品物がたくさん出ていました。」児童はみたことをそのまま述べる。「先生、お店見学に行きましょう。」「よし行こうかね。」)</p>	<p>(1) 導入</p> <p>イ 環境の設定 近所の人々の活動を示す絵、・食物の運搬、市場、百貨店、消防小屋、停車場等でなんらかの活動を示す絵、・書物、・床の上に配置されたごっこ遊びの装置、・ごっこ遊びの補助材料、・作業の道具と材料、・絵具・絵筆、・粘土の入った壺をのせたテーブルと粘土板</p> <p>ロ 環境への働きかけ 児童はごっこ遊びの装置や絵などに興味をもつ。児童は部屋じゅうに散らばっている資料をみたり使用したり、それについて話し合ったりする。</p> <p>ハ 環境への反応 児童の各自が、準備された資料や材料を使って自分の欲求に従ってやりたいこと誘発する教師の発問や指示にそって、活動を始める。</p> <p>(2) 学習活動の発展 (必要となってきたことが二輪車をつくることであると想定する。二輪車を作るためには、二輪車に必要な部分について話しあうことが必要となる。二輪車を観察する。)</p> <p>○ 二輪車(四輪車)を作りたい。 ・ 二輪車を作る。 ・ 二輪車(四輪車)を使ってごっこ遊びをする。 ・ 二輪車(四輪車)で運ぶものが欲しい。(必要なものを表にする。)</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">ごっこ遊びをしているうちに車から荷をおろすことでごたごたが起こる。話し合いのうちに、野菜をどう扱えばよいかを知るため、やお屋のことを知らなければならぬという欲求が起こる。</p> <p>○ やお屋を見学にいきたい。(見学の計画を立てる。見学事項をあげる。見学の依頼状を書く。見学の規則をつくる。)</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">「私達の見学の規則」 1 いつもいっしょにいること。 2 途中の歩きかたに気をつけること。 3 やたらにものにさわらないこと。 4 おぎょうぎをよくすること。 5 いろいろなものをみて悪口をいわず、よいことだけいう。 6 気をつけて話をきくこと。</p> <p>・ ごっこ遊びにやお屋を付け加える。 ・ 学校、やお屋、その他児童のよく知っている建物を地図上に表す。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">次のような簡単な問題を解く。 なぜものによって値がちがうのか。 なぜくだものや野菜は目方で売るのがか。 なぜ店は広告をするのか。</p> <p>・ やお屋について知ったことを全部使ってごっこ遊びを計画する。</p> <p>○ 地図に合わせてごっこ遊びの装置を作ろう。 ・ 児童はお互いに役割をきめてごっこ遊びをする。 ・ ごっこ遊びのあとの批評で、次のようなことに関して疑問が起こるだろう。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">一定の品物の値段 ・ やおやさんの売る品物はいつ、どうして仕入れるのか。 ・ 一定の品物については、ひとり月どのくらいの量を買うことができるか。</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>○ お店見学しよう。</li> <li>○ 秋祭りを楽しく過ごす。</li> <li>○ お店の品物を調査することについて話しあう。</li> <li>○ 何を調査したいか。</li> <li>○ どうして調べるか。</li> <li>○ わたしの住んでいる地域の絵地図を作る。</li> <li>○ 教室に大きな私達の町のお店の模型を作ってみよう。</li> <li>○ いろいろな物を大切にしよう話し合う。</li> <li>○ 遠足の計画をする。</li> <li>○ 大池遠足をする。</li> <li>○ 遠足の反省をする。 (色々な草花はどうなっていたか話し合う。)</li> <li>○ お百姓さんごっこについて話し合う。</li> <li>○ お米になるまでを調べる。 (お米はお百姓さんの手を経て供出され配給所にゆく。)</li> <li>○ 配給所を見学する。</li> <li>○ 見学したことを絵に描いてみたい。</li> <li>○ お礼の手紙を書く。</li> <li>○ 配給ごっこをして遊びたい。 (配給ごっこを終えて、もっと大きなお店調べをしよう。)</li> <li>○ 魚市場を見学する。</li> <li>○ 調べたことを友達に早く知らせたい。</li> <li style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">○ 多くの品物が何故よそから私の町に入ってくるのか。</li> <li>○ 郷土で産する品物を調べる。</li> <li>○ 市場、八百屋を見学する。</li> <li>○ 見学したことを絵に描いてみたい。</li> <li>○ お礼の手紙を書く。</li> <li>○ 町内の各地区毎の衣料品店を調べたい。</li> <li>○ 衣料品店を見学する。</li> <li>○ 見学して絵やお人形を作って着物をきせる。</li> <li>○ お店ごっこをしたい。 ・ 1班 果物屋 ・ 2班 魚屋 ・ 3班 野菜屋 ・ 4班 衣料品店 ・ 5班 文房具屋 ・ 6班 配給所</li> <li>○ 制作にかかる。</li> <li>○ お店ごっこをする。</li> <li>○ お正月を待つ。</li> <li>○ 冬休みの計画を立てる。</li> </ul>	<p>(この疑問に答えるために、教師が書物を読んだり話したりするのを聞く。しかし、教師の話だけでは分からないので、ここに新しい大事な要求が起ってくる。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 配給がなぜおこなわれるのか、どのようにして行われるのかわかりたい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 配給のときの様子について話し合う。</li> <li>・ 配給所についてみた経験について話しあう。このような活動をしているうちに、児童は配給ごっこをしてみたくなる。</li> </ul> </li> <li>○ 配給を今までのごっこ遊びに加えたい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 配給ごっこをやってみる。いろいろな不備な点を発見する。</li> </ul> </li> <li>○ 配給所を見学する必要がある。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ やお屋見学と同じような活動をおこなう。</li> </ul> </li> <li>○ 配給ごっこをもう一度うまくやってみよう。</li> <li>・ 見学したことについて話し合い、配給ごっこをもう一度やってみる。</li> </ul> <p>(以上は配給所中心の配給ごっこであるが、配給を受ける家庭の側についての活動には、ほとんど重点がおかれていない。教師は児童の心を、やがて配給所から家庭のほうへと移していく。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 家庭のほうへ中心をおいて配給ごっこをしよう。</li> <li>○ ひとりだけの家では、配給をとりに行くのにどうすればよいか知りたい。</li> <li>○ 近所ではどのようなときに助けあうか知りたい。</li> <li>○ ごっこ遊びに近所の人人の助けあうところを加えたい。</li> </ul> <p>(この遊びがすんだのち、教師は「ごっこ遊び」の装置や書物、絵その他に関する新しい資料を展示して米や野菜に関する興味を引き起こすようにする。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ お百姓さんごっこをしたい。(お百姓さんごっこをするにはどのようなものが必要か話しあう。)</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>グループに分かれて制作にかかる。仕事を少し進めていくうちに、いろいろ分からないことができてきたり、論争などが起ってきて、結局農家について実際のところを見てくる必要を感じるであろう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 農家についてみる必要がある。(農家のある方へ遠足する計画を立てる。見学すべきことからあげる。)</li> <li>○ 見学に行く。</li> <li>○ 制作にかかろう。</li> <li>○ 制作したものやすでに用意されているものを、床の上に配置して、お百姓さんごっこをする。</li> <li>○ お百姓さんごっこについて批評しあう。</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>その際、「トラックや牛車や手車は米や野菜をどこにはこぶのか」という問題がおこるであろう。もし児童の問題にならないときは、教師がこの問いをだす。</p> </div> <p>(児童の話し合いや教師の話によって、結局これらのものは米の配給所や八百屋の運ばれることに気がつくであろう。そこで米の配給所や八百屋の店を作り、そこに野菜や米を買いに来る人(人形)も配置して、さらに大規模な「ごっこ遊び」に発展するであろう。)</p>
---	--

## 生活科第2学年単元「おみせごっこをしよう」の学習過程表(2)

<p><b>1 活動の流れやポイント</b></p> <p>① お店やさんごっこをすることを話す。 グループでどんな店を作るか相談する。グループは、活動のしやすさから考えて、1グループ3～5人までのグループとする。</p> <p>② 「お店やさんらしくつくるには、どんなところを工夫したらよいか」と投げかけ、実際に町へ見学に行く。 ・店の構え ・看板 ・品物 ・品物のならべ方 ・値段 ・値段の表し方 ・品物の説明 ・店員さんの服装 ・掛け声等を見てくる。(見学の際、VTRを持っていき資料撮りをしておくとう便利である。教室で話し合いをするとき大いに効果を発揮する。)</p> <p>③ お店の品物づくりをする。プリンの中容器、空き箱、空き缶等家庭にある雑材を事前に集め、それをもとにして、品物づくりをする。</p> <p>④ お金をつくる。お金は、何種類もつくり、買い物に支障がないようにする。</p> <p>⑤ 準備ができた段階で、教室内に店づくりをし、ごっこ活動を行う。 ・グループを店の人と消費者に分けて行う。消費者には小遣いを決め、買い物をさせ、途中で店の人と消費者の役割を交替する。</p> <p>⑥ ごっこ活動が済んだ時点で、よく売れた店と売れなかった店の違い等を話し合い、お客を引きつける工夫等を考える。</p> <p>⑦ 各店の改善を工夫させ、再度、お店やさんごっこを行う。ごっこ活動を行うなかで店の工夫や販売の努力、消費者としての買い手の留意点に気づかせる。</p> <p><b>2 子どもの活動</b> お店やさんごっこをして お店やさんごっこをして分かったことがいろいろありました。売り出しのかんばんや「安いですよ」と書いたりして人を集めますが、いいせいひんを出さないと人は買ってくれません。また、ねだんを安くしないと人は買ってくれませんが、安すぎてもだめです。ちょうどいいねだんというものがあることがわかりました。また、品ものならべ方や、お店の人の「安いですよ」とか「しんせんですよ」というのも大切だと思いました。(H男) <sup>8)</sup></p>
--

様々な種類がある」、「お店の品物は各市場から仕入れられている」といったことが加わった程度で、「お店」のコードを十分に増殖させた学習とはいえない。

それに対して、「近所の生活」は、教師によって周到に準備された環境設定によって、まず子どもたちは、二輪車や四輪車による荷物の「運搬ごっこ」を始める。ほどなく、荷物の下ろし場所を巡ってトラブルが起こる。その解決策をさぐる。毎日野菜や果物など多くのものが荷車で運ばれる八百屋さんはどうしているか、見学することにする。見学後、ごっこ遊びに八百屋さんを加える。八百屋さんごっこをするためには、疑問が次々起こってくる。(なぜものによって値段が違うのか、目方売りするのはなぜか等) それらの疑問を解くため八百屋見学に行く。見学後、知りえた知見を組み入れて、八百屋ごっこをする。ごっこ遊びの後で、再び疑問が出る。(どこから仕入れるのか、一ヶ月どのくらい仕入れるのか等)、教師の話だけでは納得できず、児童の疑問は配給へと向かう。配給所に行った経験を話し合ううち、配給ごっこをやることになり計画を立てる。配給ごっこを行なうが、うまく出来ないため見学に出かける。配給ごっこから、野菜や米に児童の興味は移り、お百姓さんごっこへと発展してゆく。教師の示唆も加わって、最初の遊び、二輪車や四輪車の米や野菜を運ぶ遊びと八百屋さん、配給所、お百姓さんの関係に気付き、それらを取り入れた大規模な遊びに発展する。前述のように作業単元の例の「近所の生活」の場合、遊びの中から問題や疑問を積極的に発見させ、児童に既存のコードを暫定的に変更して、見学に向けての仮のコード(仮説)を設定させるアブダクションが繰り返し組み込まれる計画となっている。したがって、子どもたちを含む買い手・消費者-八百屋-配給所-農家-運送業の個々のコードの増殖ばかりでなく、野菜や米といった商品を介して世の中は循環しているという経済の一般的知識の修得も可能な展開となっている。それゆえに、学習単元「おみせ」の学習は、作業単元例の「近所の生活」の社会認識形成のレベルには達していないことになる。

次に、学習単元「おみせ」を平成元年の小学校学習指導要領改訂より小学校低学年に新設された生活科の単元事例「おみせごっこをしよう」(第2学年)と比較考察してみよう。表(2)

に示した「おみせごっこをしよう」は、「自分たちの生活は近所の人や店の人など多くの人々とかかわっていることが分かり、日常生活に必要な買い物や使いをしたり、手紙や電話などで必要なことを伝えたりするとともに、人々と適切に対応することができるようにする。<sup>9)</sup>」ことを達成するための学習過程である。「おみせごっこをしよう」では、ごっこ遊びを通して「お客を店にひきつける工夫」を体験的に学習させることがねらいとされている。したがって、こどもはごっこ遊びのあとに、「よく売れる店と売れない店の違い」を話し合っても、店の販売のための工夫が足りなかったというレベルに留まっている。その結果、再度行なったごっこ遊びのあとの子どもの作文でも、商品売るためには、いい製品をちょうどいい値段で売ること、品物の並べ方や売り声が大切であるというレベルに留まっている。学習前と比較して学習後の「おみせ」のコードが増殖しているとは言い難い。商業活動の一部の表面的な理解にとどまり、同じ2学年の学習でありながら学習単元の「おみせ」で育てられる社会認識形成のレベルに達していない。

### ③ 第4学年の学習単元「限府町と菊池電車」における社会認識形成の分析とその評価

次に第4学年の『展開カリキュラム』の学習単元「限府町と菊池電車」を取り上げて、その社会認識の質、内容及びその育成の方法原理を考察する。その際、学習単元「おみせ」（第2学年）と同様に、『補説』に掲載されている作業単元例「郷土の輸送」と比較することを通して、育成される社会認識の質、内容及び育成の方法原理の検討を行なう。

学習単元「限府町と菊池電車」は、児童のトラック等の乗物に対する興味・関心を誘発し、調査活動へと発展させることを通して、児童に「交通・運輸の発達、地域間の人や物資の交流を可能にできた<sup>10)</sup>」という交通・運輸の機能を理解させるとともに、乗物を上手に利用する技能や能力、公共及び交通のルールを守る態度を育成することをねらいとしている。作業単元「郷土の輸送」も、誘発の仕方や活動内容は異なるものの、基本的には同様のことをねらいとしてあげている。

学習単元「限府町と菊池電車」の学習過程は、表(3)に示す通りである。「導入の段階」では、児童に今までに旅行に行った所を地図に記入させたり、利用した乗物の絵を描かせたりする作業を通して、交通機関や運輸に興味や関心を持つように誘発し、さらに本格的に限府駅を中心とする交通・運輸に関する様々なことを調べてみたいという学習意欲を導き出している。「活動の段階」では、児童は、限府駅を中心とする交通・運輸の状況を把握するには、学習をどのように進めたらよいかについて話し合う活動から始め、限府駅や関係箇所の見学の必要性や調査項目、調査の方法、見学・調査に行く際の注意事項などを決定するとともに、実際に見学・調査を行っている。見学の結果、児童の興味・関心は菊池電車の歴史やその変遷、主要道路の行き先や交通量への発展していく。さらに、児童の学習は、限府駅を中心とする交通・運輸の学習結果を、立体模型図に表す活動へと展開していく流れとなっている。そして、前述の学習の成果を、地理的・空間的に発展させるとともに歴史的・時間的にも発展を促す学習として、九州一周旅行を地図上で行ったり、今の旅と昔の旅と比較したりする学習へと誘導している。したがって、学習単元「限府町と菊池電車」の学習過程は、一見児童の学習意欲や欲求を誘発して、それを起点に学習活動が発展しているように見える。しかし、調べる活動、見学活動、製作活動の前後において、教師は児童が既有的「限府駅」あるいは「限府駅の役割」のコードでは理解しがたい疑問や問題状況をつくり、既有的のコードを暫定的に変更して仮のコードを設定させるアブダクションを求める学習活動が組み込まれていない。

学習単元「限府町と菊池電車」と作業単元「郷土の輸送」の学習過程 表(3)

学習単元「限府町と菊池電車」の学習過程	作業単元「郷土の輸送」の学習過程
<p><b>「導入の段階」</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 環境を構成する。</li> <li>○ 今まで旅行を経験したことから、             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の旅行したことのある所を地図に記入する。</li> <li>・ 自分の利用した乗物を絵に描いてみる。</li> <li>・ 旅行で楽しかったことや困ったことを話し合う。</li> <li>・ 交通に関する写真や絵葉書などをみる。</li> <li>・ 町にはどんな乗物があるのだろうか。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>「活動の段階」</b> (限府町と菊池電車の関係をいろいろな角度から調べる。)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習の計画について話し合う。</li> <li>○ 限府駅を中心とする交通運輸の状況を調べる。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 限府駅、産交営業所、運輸会社等を見学する。</li> <li>ア 電車、バスの発着時刻</li> <li>イ 一日の乗降客</li> <li>ウ 通勤の様子やその範囲</li> <li>エ 運賃しらべ(貨物、客)</li> <li>オ 貨物輸送の状況を調べる。                 <ul style="list-style-type: none"> <li>a 降ろされる貨物について(どこから来るか、どんなものか)</li> <li>b 積み出された貨物(どんなものが、どこへ行くか)</li> </ul> </li> <li>カ 限府駅の施設を調べる。</li> <li>キ 客車の数や貨車の数</li> <li>ク 踏み切りの様子</li> <li>・ 見学のまとめを絵や統計グラフなどに表す。</li> </ul> </li> <li>○ 菊池部の主要道路を調べ、交通図を作る。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 主な行き先を調べる。</li> <li>・ 交通量を調べる。</li> </ul> </li> <li>○ 菊池電車の歴史や交通運輸の変遷について調べる。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ いつ頃できたか。</li> <li>・ どんなに映ったか。</li> <li>・ その前はどうかであったか。</li> <li>・ この付近の交通量の変わり方はどうか。</li> </ul> </li> <li>○ 限府町菊池電鉄を中心にした模型を作る。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 模型づくりの計画を立てる。</li> <li>・ 仕事の分担を決める。</li> </ul> </li> </ul>	<p>(1) 環境の設定 (貨車やトラックの製作およびそれを用いた貨車ごっこに、児童の興味と活動とを導くように、次のような事物を室内にならべる。)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 主な展示物(町村、鉄道、通路及び概略の地形を示す郷土の地図、日本全図、駅的全貌を示す鳥瞰図または写真等)</li> <li>2 書物(貨車、蒸気機関車等に関する書物)</li> <li>3 ごっこ遊びの道具(牛車、トラック、箱貨車、無蓋車等)</li> <li>4 工作用具(のこぎり、かなづち、きり、ドライバー等)</li> <li>5 工作台</li> <li>6 主な材料(みかん箱、りんご箱、板、くぎ、粘土等)</li> </ol> <p>(2) 環境への働きかけ (教師は児童達に、部屋中をまわって自由に絵や写真をみたり、道具をいじったり、ごっこ遊びをしたり、書物を読んだりしてよろしいという。児童たちは、よるこんですきな活動をはじめ。興味は、おそらく貨車やトラックなどを動かして遊ぶことに集まるであろう。(略)教師はその間によく児童の興味の方向や疑問などに注意して、今後の学習活動の発展に役立つ点をノートしておく。児童の発する質問は他の児童によって解決されるものもあろうし、教師がその場で説明してしまうもの、のちの討論に残しておくものもある。)</p> <p>(3) 環境への反応 (教師は、児童との会話を通して、トラック、箱貨車だけでなく、通風車、冷蔵車などに目を向けさせ、製作してみたいという意欲を掻き立てた。その際、工具を使うこと等を体験させ、道具の安全な使い方を指導する。また、あとかたづけや掃除についても指導する。)</p> <p>(4) 学習活動の発展</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 通風車、冷蔵車、無がい車、箱貨車、機関車を作りたい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 道具、材料、工法等について話し合う。</li> <li>・ 作り始める。作っているうちに分らないところや意見の合わないところがある。たとえば、                 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 通風車の中に棚があるかどうか。</li> <li>2 無がい車の横の板ははずれるようになっているか。</li> <li>3 箱貨車には窓があるか。</li> <li>4 機関車には大きな車輪と小さな車輪とがいくつずつあるか、それらの役目はどう違うか。</li> <li>5 機関車のボイラー、ピストン等はどんな風に付いているか。</li> </ol> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 駅に見学に行きたくなる。</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>○ 駅に見学に行きたい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 駅に行って調べるとを話し合う。先の疑問点のほかに                 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ol style="list-style-type: none"> <li>6 通風車の通風口の構造はどうなっているのか。</li> <li>7 冷蔵車の中へ氷を入れる所はどうなっているのか。</li> <li>8 車の側面に書いてある文字や数字は何を意味するのか。</li> <li>9 連結器はどのように出来ているのか。</li> </ol> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 見学の際の態度について児童どうして話し合い規則を作る。</li> <li>・ 見学に行く。</li> <li>・ お礼の手紙を書く。</li> <li>・ さきの疑問点がどのように解決できたか話し合う。</li> <li>・ 今まで知っていた貨車のほか色々な貨車があることを知る。</li> <li>・ 製作を続け、出来上がったものは、みんなで批評し合い、まずいところ、実物と違うところを話し合う。</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>○ もっといろいろな貨物がほしい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 見学して調べてくることとがらについて話しあい、教師は黒板に書き、児童はノートする。</li> </ul> </li> </ul>



<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 材料を集める。</li> <li>・ 製作する。</li> <li style="text-align: center;">↓</li> <li>○ 九州一周旅行を地図の上でする。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 計画を立てる。</li> <li>・ 地図を作る。</li> <li>・ 時刻表を調べ、旅行計画を立てる。</li> <li>・ 各地の名所や特産物を調べる。</li> </ul> </li> <li>○ 昔の旅と今の旅について比較してみる。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 陸の旅と水の旅について調べて、紙芝居や人形芝居や絵巻物に表現する。</li> <li>・ どのようにして、今のようになつたかを知る。</li> </ul> </li> </ul> <p style="margin-top: 20px;">[終末と発展の段階]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ お家の人や友達を招待して研究のまとめの発表会をする。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 計画を立てる。</li> <li>・ 発表をする。</li> <li>・ 反省をする。</li> </ul> </li> <li>○ 限府町の発展と菊池電車の将来について話し合う。</li> </ul>	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 どんな貨物がこの駅で発着するか。</li> <li>2 それはどこからくるか、またどこへいくか。</li> <li>3 貨物の種類によって貨車がどう違うか。</li> <li>4 貨物を送る手続きはどうであるか。</li> </ol> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 見学の態度については前に作った規則だけでよいかどうか検討し、必要があれば新しい規則を付け加える。</li> <li>・ 見学に行く。</li> <li>・ 学校からかえってきってから、先の問題がどのように解決されたか話し合う。次のことを知る。 (この駅から発送されるもの一どこへ行くか)              铸物—主として東京、紙—東京、生糸—横浜、              薪炭—東京、米—県内の他の地方、リンゴ—東京、横浜              (この駅で降ろされるもの一どこからきたか)              くず鉄—東京はじめ各地、石炭—北海道、福島、パルプ—北海道、機械類や農具—東京、川崎その他</li> <li>○ これを地図上にあらわしたい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本地図上でこれらの地名をさがし、鉄道がどのように連絡しているのかを調べる。</li> <li>・ この駅で発着する貨物の小さな模型を作る仕事を始める。</li> <li>・ 話し合いの際に、駅で見た旅客列車の中に郵便車や荷物車が付いていることに気づいた児童によって、次のような問題が出されるかもしれない。</li> </ul> </li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 なぜ郵便車は客車についているのか。</li> <li>2 客車についている荷物車と客車はどう違うのか。</li> </ol> </div> <p>この問題を話し合い</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 旅客列車の方が、貨物列車より速いこと。</li> <li>2 郵便車で運ぶものは運送会社の手を經ず、直接郵便局からとりにきて、ただちにもつていくこと。</li> <li>3 客車についている荷物車は手荷物や小荷物を運ぶこと。</li> <li>4、5、(略)等を学ぶ。</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 郷土の物産の分布図が出来上がったならば、それによって次のことを学ぶ。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 地形と産物との関係(山間部と平地)</li> <li>2 工場が鉄道の近くにあることとその理由</li> <li>3 町は鉄道に沿って発達していること。</li> <li>4 鉄道が開けない前には物はどのように運ばれたか。</li> <li>5 鉄道のできない以前の旧道にそつた宿場と現在の町との比較等</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 貨物の小模型ができると、トラックや車に積んで遊ぶ。</li> <li>・ まだレールや道路を作っていないので、混乱が起こるかもしれない。時間の終わりにごっこ遊びの批評を行う。</li> </ul> <li>○ 駅、丸通、貨物発着所、線路、道路を造りたい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ みんなで計画を立てる。製作がおおると、児童の遊びは、ずっと大きくなる。それでも混乱が起こる。この混乱の原因について話し合いの結果、シグナルが必要だということになった。</li> </ul> </li> <li>○ シグナルが欲しい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ シグナルの種類について話し合ったり絵を見たりする。</li> <li>・ シグナルや記号標を絵に描く。電灯のシグナルや旗のシグナルを作る。</li> <li>・ 児童のごっこ遊びが全く組織的になる。</li> <li>・ 駅で運輸のために働く人々の任務について知りたくなる。</li> </ul> </li> <li>○ 駅の運輸のために働く人々の任務について知りたい。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 駅の運輸のために働く人々のしごとに関する書物を読む。</li> <li>・ 児童の父兄で駅に勤めている人を招いて話を聞く。</li> <li>・ これらの人々をあらわす人形を作り、それぞれの持ち場に配置してごっこ遊びをする。</li> </ul> </li> <li>○ 児童の遊びもここまでくると大規模になり組織だつて来るので、児童は、父兄や世話になつた人を招いて、見てもらう。さきに作った郷土の物産の地図、工作物、絵等もみせる。いろいろな動作をリズムで表現して見せる。</li>
--	---

確かに、調べる活動、見学活動、製作活動を通して、さまざまな知識を獲得することはできたと考えられる。しかし、それらの知識は、児童の経験と距離があり、児童のコードを増殖させたり、生活の中で直面する問題の解決に生かされたりする質のものではない。

一方、作業単元の例の「郷土の運輸」についての学習過程は、表（3）に示す通りである。学習単元「限府町と菊池電車」の学習過程と異なる点の一つは、児童がトラックだけでなく様々な乗物を作ってみたいという学習意欲を誘発するだけでなく、どんな道具で、どのような材料を使って、どんな工法で作るかという具体的イメージをもって乗物づくりの学習活動を開始する「学習活動への発展」に誘導する過程（「環境の設定」、「環境への働きかけ」、「環境への反応」）が、極めて用意周到に計画されていることである。

このことは、児童を多様なまた質の高い製作活動へ誘導することによって、やがて疑問や問題の発生、さらには児童間の意見の対立が生まれることを、予期して計画された過程と考えられる。そして、「郷土の運輸」の「学習活動の発展」過程は、表（3）にみられるように、基本的には児童の製作活動、見学、調査、模型づくり等の活動を、軸に展開するかたちをとっている。しかし、詳細にみると、例えば、製作活動の中から生じる疑問や問題、意見の対立（学習過程の波線の囲み部分：筆者書き入れ）を自覚させ、その解決のための活動に取り組みせ、その結果をもとに、さらに質的に高い活動（例えば、貨車には他にも色々な種類がある、製作した貨車と実物とはどこが違うか話し合う。<sup>13)</sup>）へ発展させていく展開を、連続的に行う構造になっている。

作業単元例の「郷土の運輸」の学習過程は、前述のように「限府駅と菊池電車」と同様に児童の製作活動、見学、調査、模型作り等を軸に展開している。しかし社会認識形成の観点から見た場合、全く異なっている。「郷土の運輸」の学習過程の諸活動の中では、児童の既存のコードでは対処できない疑問や問題状況を作り、既存のコードを手がかりに仮のコードを設定して調査や見学に出かけるアブダクションを含む学習活動が数多く計画に織り込まれている。したがって、「貨車」や「客車」のコードの増殖だけでなく、郷土（学習者の町）と他地域が貨車や客車によって社会的に結ばれているという運輸の機能面の理解も可能にしている。

#### ④ 学習単元における社会認識形成の有効性と限界

これまで、学習単元「おみせ」（第2学年）及び「限府町と菊池電車」（第4学年）を取り上げて、『補説』に載せられている相当の作業単元例の「近所の生活」（第2学年）及び「郷土の輸送」（第4学年）との比較考察を交えて、経験主義教育の特質を視野に入れた社会認識の形成、すなわち「コード増殖としての学習」言い換えれば「既存のコードを暫定的に変更し、仮のコードを設定する試み」であるアブダクションが活発に行なわれる要件を備えているかどうかを視点として分析と評価を行なってきた。

学習単元の学習過程は、詳細な分析を行なった前述の「おみせ」や「限府と菊池電車」だけでなく表（4）に示す各学年の学習単元の「活動の内容」に示すように、原則的に児童を学習へ誘発する「導入」の段階、児童が心から没頭するごっこ活動や構成活動、見学・調査活動等の活動を展開する「活動」段階、保護者や地域の人たちを招いて行なう発表会や展覧会、展示会などで学習を締めくくる「終末」段階から構成されている。一方、作業単元の例の学習過程は、基本的には児童の学習意欲を喚起する教師の「環境設定」に対して、児童が「環境への働きかけ」及び「環境への反応」を示すと、児童をごっこ活動や構成活動、さらに見学・調査等の本格的な「活動の発展」へと誘導する、そして学習の「終末」では、保護者や地域の

人たちを招いて行なう発表会や展覧会、展示会などで学習を締めくくる学習を軸にしている。一見両者の学習過程は類似している。しかし、作業単元の例の学習過程の場合、ある活動から次の活動へ移行していく際に、児童の基本的な欲求にのみ依拠するのではなく、活動の中から生じる疑問や問題、意見の対立を自覚させ、アブダクションを含む過程となっており、「コード増殖としての学習」や知識の一般性を高めていく契機を含む構造になっている。それに対して、「学習単元」の場合、低学年では、数が少ないもののアブダクションを含む学習単元もあるが、多くの場合、特に中・高学年では、経験と切断された知識を調査・見学活動や製作活動等を通して修得させるものもある。しかし、学習単元はコアカリキュラムの中心課程（学習）として位置付けられており、知的成長だけでなく児童の地域社会へ積極的に関わろうとする意欲や態度の育成、また協同・協力して製作や発表、展示等を実行する技能や能力等を併せて育成すること、言い換えれば社会的実践力の育成をめざしており、この面では有効に働いていると評価できる。

学習単元の展開過程 表(4)

各学年の学習単元名		学習過程における活動の内容
1年	のりもの	〈導入段階〉のりものの絵や玩具を集める。→〈活動段階〉のりものの遊びをする。→電車ごっこをする。→限府駅を見学する。→のりものごっこをする。→〈終末段階〉限府の「のりもの」について考えてみる。 <sup>14)</sup>
2年	ゆうびん	〈導入段階〉郵便について話し合う。→家庭の葉書絵葉書手紙を集める。→〈活動段階〉郵便ごっこ準備→郵便ごっこをする。→限府郵便局を見学する。→見学したことを文と絵に表す。→電話遊びをする。→限府町の地図に郵便局とポストを立てる。→教室に郵便局を作る。→郵便ごっこをする。→〈終末段階〉郵便局にお礼の手紙を出す・転校したお友達や親類の人に手紙を出す。 <sup>15)</sup>
3年	限府町	〈導入段階〉町の高いところに行って私達の町を展望する。→限府町の成因を考えてみる。→〈活動段階〉今の限府町のパノラマを作ろう。→昔の限府町と今の限府町をくらべてみよう。→今までの勉強をかべ新聞や紙芝居にまとめる。→〈終末段階〉父兄や見学調査でお世話になった人を招待して発表会をする。 <sup>16)</sup>
4年	人と火	〈導入段階〉観察記録「温度しらべ」について話し合う。→薪や木炭の配給をよく町でみかけることについて話し合う。→「防火週間」の行事に参加しよう。→〈活動段階〉炭焼き場の見学→「炭の旅」を文や絵に描く。→「木炭」の役目を絵や文に表したり、その効用を実験したりする。→町の練炭工場の見学→マッチが出来るまでの発火法や燈火の歴史について調べる。→「防火」について町の機構を調べる。→〈終末段階〉パノラマにしてみよう。 <sup>17)</sup>
5年	模擬町会	〈導入段階〉社会の出来事について話し合ったり切り抜きを集める。→学校子供会の役員改選について話し合う。→限府町にある施設にはどんなものがあるか。→町役場や町議会を見学し研究する。→〈活動段階〉発表会を開く。→模擬町会の準備をする。→第一回の議会を開く。→第二回の議会を開く。→第三回の議会を開く。→〈終末活動〉研究したことを「発表会(劇)」にまとめる。→「6年生を送る」～1カ年の反省に文章化したものをまとめる。 <sup>18)</sup>
6年	日本と関係の深い国々	〈導入〉貿易について日本と最も関係の深い国について話し合う。→〈活動段階〉日本と外国との地理的なつながりを調べる。→日本と外国との歴史的なつながりについて調べる。→最近の日本と世界の関係について調べる。→日本と関係の深い国々を旅行してみよう。→アメリカ合衆国を旅行してみよう。→ソビエト連邦を旅行しよう。→中国を旅行してみよう。→その他の国々も簡単に調べてみよう。→各国の風俗、習慣、生産物等を色々な年間、統計資料等で調べて展覧会を開こう。→〈終末段階〉外国及び外国人に対する正しい態度について考える。→世界平和と日本人の使命を研究する。 <sup>19)</sup>

## おわりに

本小論では、隈府小学校が教育課程の編成をコアカリキュラムに変更して、最初に作成した第二次プラン（昭和24年1月末に公表）及びその改善案である第二次補正プランの構成原理の分析、次に第二次補正プランに基づく具体化の過程、すなわち「展開カリキュラム」及び「展開案」の作成の過程や通底する原理、各々の特徴の分析、さらに社会認識教育観点から中心課程（中心学習）として位置づけられている「学習单元」の有効性と限界について考察を行った。

詳細な考察及びその結果は、各章節においてすでに述べた通りである。それらを概括すると以下のような結論となる。

- 1 生活主題展開案である第二次プランを、社会的視点から目標や中心学習、基礎学習の見直しを図った第二次補正プランの構成原理は、当時のカリキュラム研究に絶大な影響を与えていたコア・カリキュラム連盟の指導者の理論や彼らの紹介論文の考え方を、次々に取り入れ、組み合わせたものから作成されていた。したがって、理論構成は他のプランと比較して極めて複雑である。しかし、十分に理解しないで取り入れたり、相矛盾する論を取り入れたりしているため、理論的に不整合な点が多く存在している。しかも、学習方法原理に関する考察を欠いているため、授業の深まりや広がり、教師の恣意的な指導や児童の学習意欲や欲求に左右される危険性を原理的に内在していた。
- 2 第二次補正プランは、資料单元（学校全体の案）、展開カリキュラム（学年案）、展開案（学級案）というかたちで具体化されている。しかし、前述の理論の未消化や理論的不整合、学習方法原理の欠如がそのまま反映されているだけでなく、具体化されるにつれて各单元の展開過程や完成度にばらつきがある。全体的にみると、具体化されるにつれてレベルが落ちている。
- 3 社会認識教育の観点から考察した結果、第二次補正プランは、前述のように社会的視点から見直しを図ったにもかかわらず、学習单元に基づく学習は『補説』に例示されている作業单元学習のレベルに達していない。しかし、低学年においては、平成元年度に設置された生活科を通して育成される社会認識よりも高い水準にある。また、地域社会へ積極的に関わろうとする意欲や態度等を含めて、社会的実践力の育成といった側面から見た場合、各学習单元は有効な実践となっている。

隈府小学校第二次補正プランの理論構成の全体及び実践は、昭和24年12月26～28日に隈府小学校を会場校として開催されたコア・カリキュラム連盟九州地区研究集会において公開された。それ以前に、コア・カリキュラム連盟九州地区研究集会は昭和24年6月に、大分市の春日町小学校において、同年10月に鹿児島県曾於郡の大崎小学校において開催されていた。いずれも経験主義教育に立つコアカリキュラムによる教育課程を編成していた。隈府小学校における研究集会を契機に、こうしたコアカリキュラムに対する評価を巡って、肯定的評価を下す梅根悟氏や海後勝雄氏と批判的な評価を下す広岡亮蔵氏との間で論争が繰り広げられた。その広岡亮蔵氏の結論の一つが、「カリキュラム」誌（コア・カリキュラム連盟編集）の第15号（昭和25年3月発行）に掲載された論文「牧歌的なカリキュラムの自己批判<sup>20)</sup>」であった。

氏の主張によれば、従来のコアカリキュラムは、1930年代のアメリカのそれを模したもので、社会的協同観を根底においた教育目標、社会機能に基づくスコープ、児童の興味を中心にに基づくシークエンスから構成されており、我が国の現実に合わないものである。現下の我が国の危機的課題は、「生産復興」、「輸出振興」、「前近代性払拭」であり、「直接的には経済や政治の課題であるとともに、間接的には教育の課題であり目標でもある<sup>21)</sup>」と捉えていた。したがって、社会機能代わって、「経済的領域・社会的領域・文化的領域」をスコープに、児童の興味を中心に代わって、「子どもの発達段階に応じた環境への取り組み」をシークエンスとしてカリキュラムを構成すべきであるというものであった。

こうした社会改造主義教育観からの批判は、コア・カリキュラム連盟の指導のもとに教育課程論を構築し、具体的カリキュラムを編成するとともに授業公開まで行った当時の限府小学校らの教師にとって、正当な批判や生産的な批判でないばかりでなく、すべてを否定することに等しいものであったと推測される。求めていた批判は、経験主義教育に立つコアカリキュラムによる教育課程論上の不整合を修正する具体的見解や方法、学習方法原理に対する知見、学習指導法に対する示唆等であったはずである。しかし、その否定的見解の影響は強く、結果的に限府小学校のプランや実践の公開は、経験主義教育に立つコアカリキュラム運動の退潮へのきっかけを作る歴史的使命を負うこととなった。したがって、前述の広岡氏の論文発表と同時期に、経験主義教育に立つ小学校社会科の学習方法原理及び指導法について言及した『小学校社会科学学習指導法』（文部省 昭和25年3月）<sup>22)</sup>も発行されたが、全く注目を浴びることはなかった。その後コア・カリキュラム連盟は、広岡氏の主張の方向に路線を変更し、コアカリキュラムに代わる三層四領域によるカリキュラム編成の議論を経て昭和26年に「歴史的現実に立つ」カリキュラム<sup>23)</sup>の編成を宣言するとともに、昭和28年に日本生活教育連盟と名称も改称した。そして、昭和30年には日本社会の基本問題を柱とする『社会科指導計画《総説編》』<sup>24)</sup>を発表した。

再び歴史は巡って、今日体験的活動を重視する「自己教育力」や「新しい学力観に立つ教育」、さらに「生きる力を育む教育」等が、盛んに論じられ、数多くのカリキュラム開発やそれに基づく社会科の実践も積み重ねられている。しかし、生活科と社会科の趣旨や目標を取り違えた実践や総合的な学習と社会科の趣旨や目標を取り違えた実践が数多く報告されている。それらは、昭和20年代前半の経験主義教育に立つ教育論やカリキュラム論、社会科の実践等が、課題として残した道を再び歩んでいる。それを思うとき、限府小学校第二次修正プランをはじめとする当時のプランの正当な批判や生産的な批判、言い換えれば正当な評価を行うとともに、それらを今日の教育に生かす必要がある。本小論が、その試みに挑戦したものであるが、学習展開案のレベルでの分析であるため、子どもが身に付けたと考えられる社会的認識はあくまで推測の域をでない。今後、困難な作業ではあるが、授業記録の残されている同質の実践を分析するとともに、それらを手がかりとして戦後の新教育期におけるコアカリキュラムを通して育成された社会認識質や内容の実像に迫っていきたい。

(追記) 第二次大戦後の九州におけるコアカリキュラム編成運動について研究を進める中で、限府小学校を訪ねたのが、昭和63(1988)年6月であった。しかし、当時の資料は全く存在しなかった。学校長から、限府プランを作成した当時勤められていた先生が退職され学校の近くに住んでおられるという話を伺った。その先生が、益崎(旧姓生田)とよ先生であった。その時には、所用で居られなかったため、後日電話でお話をして、資料を探して頂くことに

なった。ほどなく、自宅2階の物置から、限府プランの第一集と第三集及び先生の展開案、学習指導案が見つかったので、学校の方に届けておきますとの連絡を頂いた。早速それらの分析を行い学会で中間的な発表を行ったものの、第二集が見つからないため原稿化を見送らざるをえなかった。平成5（1993）年に、熊本県教育委員会派遣現職教員研修生として熊本大学教育学研究科に在籍していた北里敦氏（当時本渡市立本渡南小学校教諭）から、昭和20年代におけるカリキュラム運動史<sup>25)</sup>に取り組んでいるが、限府プランのことについて教示して欲しいとの連絡を受けた。前述のいきさつを述べ、第二集を未だ入手していない旨を話した。その後、平成7（1995）年4月に、彼から修士論文とともに山口満氏（当時筑波大学教授）から入手したという第二集が送られてきた。原稿化に向けて、非常に有り難い資料提供であった。しかし、それ以降、8年の歳月が経過した。やっと、ここに論文としての完成をみることとなった。論文が完成するまでには、限府小学校の関係者をはじめ多くの方々にお世話になった。特に、研究への手がかりとなる最初の資料を提供して頂きました益崎とよ氏、第二集を送付して原稿化への援助を頂いた北里敦氏には、特に名前を記して御礼申し上げたい。）

#### 注

- 1) 池田久美子「はいまわる経験主義の」再評価—知識生長過程におけるアブダクションの論理—（『教育哲学研究』第44号 1981年 24頁）
- 2) 前掲1）25頁
- 3) 『小学校社会科 学習指導要領補説』 文部省 昭和23年9月15日 74頁
- 4) プロジェクトメソッドは、元来実際の作業を含む職業科や家庭科の教授法として始められた。その後、W・H・キルパトリックによって、教育の一般的方法原理として理論化された。我が国には、大正自由主義教育時代に紹介されたが、戦後、経験主義に基づく単元学習の方法原理として広く取り入れられることになった。『小学校社会科学習指導法』（文部省 昭和25年3月発行）では、「欲求を実現する型」の学習方法原理と位置づけられている。そして、「実現すべき問題の明確化」、「実現に向けての計画立案」、「実現に向けての遂行」、「活動結果の評価」のプロセスを踏むものとされる。
- 5) 前述の『小学校社会科学習指導法』（文部省 昭和25年3月発行）では、「欲求を実現する型」に対して、「なぜ」、「いかにして」、「なんのために」、「なにが」などの問題を解く活動は「問題を解決する型」として区別している。この型の学習段階として、次の5段階をあげている。(1) 児童が問題に直面すること、(2) 問題を明確にすること、(3) 問題解決の手順の計画をたてること、(4) その計画に基づいて、問題の解決に必要な資料となる知識をみつめること、(5) 知識を交換し合うこと。そして集められた知識をもととして、問題の解決のみとおし、すなわち仮説をたてること、(6) この仮説を検討し、確実な解決方法に到達すること。前述の5段階は、D.デューイのいう反省的思考の過程をそのまま引用したものである。
- 6) 『限府プラン 第二集 展開カリキュラム』 限府小学校 単元社 昭和24年12月10日 23～48頁から抜粋したものである。
- 7) 前掲1）44～74頁から抜粋したものである。
- 8) 『生活科ハンドブック—実践例105—』 筑波大学附属小学校・初等教育研究会 図書文化 1991年2月 106～107頁
- 9) 『小学校学習指導要領』（文部省 平成元年3月）・第2章・第5節「生活」の〔第1学年及び第2学年〕の目標(1)「自分と学校、家庭、近所などの人々及び公共物とのかかわりに関心をもち、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動できるようにする」に対応した「内容」の〔第2学年〕(1)に相当する内容である。

- 10) 学習単元「限府町と菊池電車」の学習指導の目標として、11項目（理解目標4，態度目標4，技能目標3）があげられている。そのうちの理解目標を概括したものである。
- 11) 前掲3）86～92頁から抜粋したものである。
- 12) 前掲1）75～96頁から抜粋したものである。
- 13) 前掲1）88頁
- 14) 前掲4）15～22頁から抜粋したものである。
- 15) 前掲4）49～60頁から抜粋したものである。
- 16) 前掲4）70～78頁から抜粋したものである。
- 17) 前掲4）79～85頁から抜粋したものである。
- 18) 前掲4）108～114頁から抜粋したものである。
- 19) 前掲4）135～156頁から抜粋したものである。
- 20) 『カリキュラム』（コア・カリキュラム連盟編集 第15号 1950年3月）12～17頁
- 22) 経験主義教育に基づく学習方法原理について前掲2）及び3）を参照
- 23) コア・カリキュラム連盟は昭和23年10月の「コア・カリキュラム連盟：提唱・招請・規約」に代わって、昭和26年1月に「われわれの信条」を発表した。その第1項に述べている。
- 24) 日本生活教育連盟編『生活教育の前進Ⅵ 社会科指導計画《総説編》』 誠文堂新光社 昭和30年5月
- 25) 北里敦氏は、研究成果を修士論文『20年代の熊本県におけるカリキュラム運動に関する一考察—限府プランを中心に—』（平成5年度大学院修士課程派遣報告書）にまとめている。